

Supplementary Note and Reproduction of Utoki in the Collection of the Shomyoji Temple in Komatsu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: KONISHI, Yoko, KIGOSHI, Ryuzo, KURODA, Satoshi, GAO, Yuan, MUROYAMA, Takashi, WATANUKI, Tamon メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00061483

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏鬼記』 (明和六年九月～十一月十六日)

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

小 西 洋 子

石川県金沢城調査研究所 所長

木 越 隆 三

人間社会研究域学校教育系 教授

黒 田 智

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

高 遠

石川県立図書館 加能史料調査委員

室 山 孝

石川県立金沢辰巳丘高等学校 教諭

渡 貫 多 聰

Supplementary Note and Reproduction of Utoki in the Collection of the Shomyoji Temple in Komatsu

KONISHI Yoko

KIGOSHI Ryuzo

KURODA Satoshi

GAO Yuan

MUROYAMA Takashi

WATANUKI Tamon

Abstract

Utoki was a daily journal kept by Shuko, the eleventh chief priest of the Shokoji Temple in Komatsu, during the year 1769. The journal is famous for the historical information it contains on Komatsu-jian-sodo. Utoki not only has important information about the Jodo Shin sect of Buddhism in the Edo period but also various stories that Shuko recorded that should capture the interest of researchers. It is our intention to introduce a reprinting of the entire text in several installments. We hope that researchers will use our reprint to deepen discussion on Komatsu-jian-sodo.

Keyword

Komatsu-jian-sodo, Gunchu-goci, Nomi-gun, early modern Jodo Shinshu sect

【資料紹介】小松市称名寺所蔵『烏鬼記』(明和六年九月～十一月十六日)

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

小 西 洋 子

石川県金沢城調査研究所 所長

木 越 隆 三

人間社会研究域学校教育系 教授

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

高 遠 智

石川県立図書館 加能史料調査委員

室 山 孝

渡 貫 多 聞

石川県立金沢辰巳丘高等学校 教諭

要旨

小松称名寺所蔵『烏鬼記』は、小松勝光寺十一代住職周好による、明和六年（一七六九）一年分の日記である。特に「小松寺庵騒動」に関する史料として知られている。また、周好が日々伝え聞いた話が書き留められており、小松町周辺のみならず、大聖寺・越前の出来事など、その内容は多岐にわたる。

本史料の従来の翻刻は誤脱もあるため、改めて全文を翻刻し、紹介する。翻刻により、多くの研究者の利用に資したい。本稿は五回目である。

【翻刻】

九月朔日

一、朝方雨者降不申、折々曇候得共、苦ニ成候程之事ニ而も無之、景色ハ宣布相見申候、日之内替義者承不申候。

一、当所之在於郷谷道ドアヒ与申所有之候、其所之橋者少々成橋ニ候得共、橋板式枚重ニ而候處、橋之裏之板焼候而、表の方ハ無難ニ而候得共、一向ニ往来無之候、橋之裏板斗焼候事、何之故ニ而候哉、難知、見聞之人々怪布存居由、承之候旨、來生寺咄ニ承申候、

二日

一、朝方景色宣布、夕方者薄曇候故、夜中二者はら／＼と二三度雨降申候、其外差而相替義者一向無之候、

キーワード
「小松寺庵騒動」「郡中御影」能美郡 近世浄土真宗

同道二而串へ芝居見物參候而、夜更帰寺致候節、氣を付見候得共、先達而出候星者、一向二見へ不申候、相尋候処、頃日者出不申由、道中之者共咄申候、

四日

一、朝方快晴二而、九頃方少々南風吹候得共、為指事二而も無之候、夜も静、昼夜共二相替義者一向無之候、

一、勢州内宮外宮共二、士農工商之末々之道具悉納り居申候、遷御之節者、根^網宜共其道具を一宛仮宮方新建之本宮へ持運候後、神体為移候、其時分ハ丁と牛刻頃^正二相当り候、其神体之為移候砌者、神風与申物二候哉、そよ風吹、遷御濟候得者、風も吹止候、神之現勢尊事二候旨、筒金屋久兵衛咄^{二承}之申候、

五日

一、朝方曇居候得共、先ハ雨も降不申候所、七半頃方降出シ、夜五頃迄者唯はらくと降、又者晴候二、余程夜二入候而者、頻ニ雨降様子ニ相見申候、其外昼夜共二差而相替ル品も無之候、

六日

一、^(前田真教)金城殿被仰候者、於当家中知行相應二人馬を可抱処二、人馬者左もなくて、禄不相應ニ女を抱置候事、一向難其意得、女者戰場之邪魔二者成候得共、便り与可成者ニあらす、依之禄ニ応シ人馬を可抱か武士之本意也、然者は迄之仕方不心得之至ニ候間、向後改不本意、禄相應二人馬を可抱事勿論之事ニ候得者、此通可申渡旨被仰出候而、御家中一統迷惑之様子ニ相見申候、勿論御広敷杯ニ者、無益之女者不殘御暇被下候得者、唯御尤各閉口致居候旨、觀心咄^{二承}之申候、

一、於当地町人不相應之衣服を着用致候事、是又不心得之段ニ候得者、以後者相應之衣類を着用致、無益之金銀を費申間敷旨、末々迄可申

渡段、金城殿被仰出候、然者加様ニ國之為、家中之不心得之趣共、被仰出候事共方相考見候得者、殺生ニ事寄、毎日所々方々へ御出之度毎ニ、役人中方被触出候道与者相違致、急ニ別之道へ御出之事、

度々之事ニ候、此等者先金沢町中并近所近郷之様子巡見被成様子ニも相見申候、然者唯事ならぬ思召入、何れも勘心、最初与者違、奉仰斗ニ候旨、則觀心咄申候、

一、朝方曇居申候、四頃方少々雨風吹候間、暮合ニ者荒、雨暫時降雨候得共、苦ニ成候程之事者無之候、夜者静ニ何事も無之候、

七日

一、朝方快晴、夜も静成事共ニ而、一向相替候義者無之候、昨日用事有之、金沢へ知照遣候処、彼地ニおるても替候義承不申候与而咄申候、併金城殿弥当廿三日江戸御発駕相決申候ニ、此間之御行歩以之

外繁敷候而、府内之小路^一迄細ニ御出ニ而候様子咄申候、

一、時次郎殿平生御着用之物者綿服ニ而御座候由咄申候、加様成事共御家中町家被仰出候事も、急度聞目御座候旨相聞申候、

八日

一、朝方景色も宣布、快晴致候、昼之内差而替義無之候、夜も静、少々夜半頃方南風有之候外、別而替義無之候、

九日

一、朝方風余程吹、四頃方打曇り、八頃方雨少々降候得者、風も止、雨も晴、快晴致候処ニ、夜半頃雨余程降出候得共、早速ニ晴申候、

此外差而相替候品茂無之候、

一、隣院殿^(勤馬寺)妹子越前西光寺殿奥方、今日八頃着有之候、乍暫賑敷事ニ而御座候、則新發意光^(カ)東丸殿御同道ニ而候、

十日

一、朝方景色も宣布、次第ニ快晴致候、昼之内別而相替候義無之、夜も静ニ差而替候事も無御座候、

十一日

一、昨日方赤井殿引上報恩講御勤ニ付、今朝參勤致候処、松任真教寺新發意宮内卿初而逢申候ニ、七日之日霧降候、其形者魚之目たま之如く、中白ク縁水色ニ而、目形四五匁斗、いほろ有之候、降積候事

壱式寸斗二而候旨、御咄承之申候、珍敷事与而皆々評義致候、

一、於「貼紙浮柳」、一昨日式拾歲斗僧、松之枝二而首をしめ、死居申候

を慥ニ見届帰り候旨、左京咄來生寺二承申候、則其日葺狩ニ彼地へ參見候

与之事ニ而咄申候、何國之僧ニ候哉、生國も知らず申候哉、承度存候、

一、朝夕景色宣布、夕方者少々雨景色ニ相見候得共、夜も宣布静成事

二而候、

十二日

教如一、当郡へ信淨院様御免被遊候御真影、先達而候再三御本山家老中為下知申来候故、一郡御門末へ段々申入、猶更遂吟味候處、在町御門葉中候者、口上書を以願申候、其文言如左、

口上書を以申上候

当郡江被為有御免候御開山様御真影、今般六ヶ寺共被成御供可被成御上京候様、御本山御家老様方候御下知之御紙面到来二付、各様方候御供ニ而御上京可被成段、一郡一統被仰渡奉承知候、乍併右御影様之義ハ一郡江御免被為成置、往古方御崇敬申上來得者、暫ニ而も御別レ申義御門徒中甚歎敷、迷惑ニ奉存候、依之御影様之義ハ御上京不被為成候様ニ奉願上候、此段御家老様方へ宣布被仰上、願之通御慈悲を以被為仰付被下候ハ、難成柰可奉存候、以上、

能美郡小松町在

式百式拾余村惣代

八月

同郡村方惣代

町四拾六人印連
在方拾人印

助役
勸帰寺様

集会所
月番衆御中

勝光寺様

右之通相調願ニ出申候、其人數物代番匠屋半兵衛・笛木屋六右衛

門・北市屋長兵衛・能美屋又助・串屋五郎兵衛・伊勢屋弥兵衛・朝倉屋伝七、此人々被出候ニ付、拙寺共兩人書付見届取置申候間、追付飛脚を以、家老中へ可申達段申入候、

一、朝夕以之外快晴、昼夜共ニ差而相替候義一向ニ無之候、

十三日

一、朝夕景色宣布、夜も五頃迄者靜ニ、十三夜之月も澄渡り見候處ニ、俄曇り、雨頻ニ降、風も余程有之候得共、早速晴申候、乍併夜之内風者少々宛有之候、

一、今日七半頃越中今石動道林寺殿奥方隣院殿へ御出ニ而候、扱々此間者賑敷事ニ而候、

十四日

一、朝夕打曇り風茂吹候得共、雨者降不申候、夜者宣布靜成事ニ而候、先達而御真影御供上京之義ニ付、当郡町在同行中歎書付指出候故、

五ヶ寺連印添紙面致候、其文言如左、

一筆致啓達候、先以御所様方御機嫌克被為成御座恐悦奉存候、然者今般再往御召狀之趣、一郡一統へ為申聞置候故、返答之義段々是迄遂吟味候處、別紙写書付之通、相歎申聞候、右之仕合故拙寺共打寄示談仕候得共不能了簡候、此上如何取計可仕候哉、御窺申上候、右之趣御家老衆中へ被仰上被下度、如斯ニ御座候、恐々謹言、

称名寺印

勝光寺印

本覚寺印

本光寺印

勸帰寺印

九月十四日

勝光寺印

本覺寺印

勸帰寺印

集会所

右之趣相調、并書付写壱通相添ハ、態飛脚ニ而京都へ為登申候、則

今昼立ニ致候、執筆笠屋午四郎ニ而御座候、右添状之文言角院方二本繪寺

見申度旨二而、方々へ手入致候由ニ付、秘文ニ致可申段、各々申合候、一、京都東六条御寺内ニ而之当郡之一件者、幾度御召状■■指下シ候而も外五ヶ寺之分者上京無之候間、兎角唯今而者加賀公辺へ頼、上京有之候様ニ致度義可然与之取沙汰ニ而候事之義承候与而、筒金屋久兵衛咄ニ承之申候、

十五日

一、先月廿六日江戸以外之大風ニ而、於公方茂御殿壱ヶ所吹壊候、其外者金城殿於屋敷茂廐三拾軒吹壊申候、町家者於所々數多有之候、頃日者唯何となく江府も物騒敷相見申候旨、申來候而承候段、

於金沢取沙汰有之、本龍寺咄ニ承候旨、則來生寺咄ニ承之申候、

(福井東別院本瑞寺カ)

一、越前福井御坊於門前、此頃毎夜白旗六本宛相見申候所、頃日者壱本無之候ニ、其壱本の白旗者白山ニ當り而相見申候、奇怪之至二候旨承候与而来生寺咄候、

一、当月七日之乱風ニ本吉方官腰迄之間者、何物之通候哉、作方畠物者茎立ちきれ而無之、田者穂切、或者粉落、其上雪之如ニ相見申候物之水色成七八寸宛其處毎二干付居候故、土民百姓等者以之外相歎、野々市組又ハ測上組ハ各々背御法度、歎之余り青稻ヲ刈脊負十村ヘ参候所ニ、一向ニ不出合候故、直ニ御算用場ヘ参候、道中ニ而廻り之者付留申候、然ニ彼者共御算用場江既ニ参候所ニ、役人中被申候者、不便成事ニ者候得共、青稻を刈候事者御法度ニ相違致候故、重キ取沙汰ニ候間、成程も宣布可取計間、先帰宅致候様ニ与之事故、先帰り候、其村々之肝煎共ハ、右之趣指留候得共、逃參候与而息を限ニ跡る參候故、申訳相立候、乍併測上之十村杯者可申宥處を無其義、百姓等ニ御法度之青稻を為脊負、御算用場ヘ出シ候而已歎、全体百姓共ニ不逢候旨、其意難得与之評判ニ而、余程六ヶ鋪可有之候与之金府之取沙汰之段承候与而、是も即來生寺咄ニ承之申候、何事ニも致シ、左様成騒敷事者、不宜相ニ而も可有之哉与被案候、

一、先達出候虎尾星者、先月十三日之夜限ニ而、其後者見不申候、然

所先月十三日之夜七頃ニ者光り之長廿凡四拾間程ニ相見申候旨、恵美須屋喜兵衛咄ニ而被聞候由、平野屋なか咄ニ而候、一、今日者朝薄雲候景色ニ而候得共、雨も降不申候、夜者余程宣布相見申候、然者夜四過頃隣院殿々京都集会所々御飛脚到来候、早々可出旨為御知故、何事ニ候哉与驚、早速參候所、御書面到来、其文言如左、

一筆致啓達候、然者信淨院様御免御開山様御影并右御影ニ附候書付等御添、御影御供御上京有之様、再三依御下知申達候處、三度共ニ同様之御返答ニ而、就中去月十六日御下知状御返答之趣者、先達而御下知之趣、能美郡中御門末へ御申聞ニ付、能美郡御門末返答之儀■■被及御催促ニ候得共、在方耕作等繁多故、是迄返答之義一統ニ相済不申、延引ニ罷成候由、此節暫町在方手透ニ有之候得者、如定例御影報恩講御引上御執行有之候由、其節町在御門末へ御影御供之義御申談可被及御返答旨、委細御書面を以御家老中へ申上候處、御承知之上此節御返答御待之事ニ御座候、然処報恩講去月廿一日方御執行之由、其上日数も有之候、今以何之御沙汰も無之、被對御本山へ御下知御違背不敬之御勵ニ御座候、今般態又々以飛脚申入候、此飛脚相達次第、早々御上京可被成候、若被及御違背ハ、急度思召有之事ニ御座候、何分御影御供ニ而、早速御上京之有無、曉与御返答御申登セ可被成候、右之段御家老中依御下知、如此ニ御座候、恐々謹言、

集会所月番

印

九月十一日

勸帰寺殿

本光寺殿

勝光寺殿

称名寺殿

右之通申来候、則御飛脚徳助与申者二而候、此返書出来次第受取、金沢御坊へ御用有之間、可罷越旨申候ニ付、又々伊勢屋弥兵衛・串屋五郎兵衛両人を以、飛脚之者へ申入候者、御書面之御返答可致候得共、今晚者仲間之内有合不申方も有之候間、金沢御坊之帰り上京之節返書相渡可申旨申候得者、飛脚申候者、出来候迄ハ何日三而も逗留致、返書受取金沢へ可罷越段、集会所役人中より被申渡候間、逗留仕候与申候、依之仲間中留主の方へ者飛脚を以申越、明日昼迄之内返書相渡可申段申聞帰り申候、仍而相調懸り候、乍併余り明近ク相成候故、先止メニ致各々帰宅致候、且飛脚徳助爰元へ參候御状箱之外二壱尺武三寸斗之箱、油紙包并状箱箱壱ソ所持致居申候、依之推察致候者、爰元之返書次第、金沢御坊ニ而之取組事も可有之哉与存、此度之返書者不相障様ニ致度与各々申合候、若々於金沢御坊破封有之候与も、何之詮も無之様ニ文柄相考可申与之事ニ候、且幸称名寺殿頃日寺役ニ而在府之事ニ候得者、御坊様子聞合度与之趣ニ而、俄飛脚連代寺屋半兵衛を以、金沢へ右之趣共委曲申遣候、

十六日

一、夜前調置候集会所江之御書面之返書今日清書致候、文言如左、

御飛札致拝見候、然者御所様方御機嫌克被為成御座恐悦奉存候、然

者此度御書面之趣委曲致承知候、御影御供之義ハ、去月引上報恩講參詣之砌、町在御門末中段々遂吟味候處、返答有之候故、先達而飛脚を以申上候間、此度御飛脚之御答迄如斯ニ御座候、恐々謹言、

称名寺印

勝光寺印

本覺寺印

勸帰寺印

九月十六日

右之返書執筆觀照寺ニ而相調、串屋五郎兵衛を以万屋八兵衛方へ遣、飛脚へ相渡申候後、赤井殿へ之飛脚半兵衛帰り、野々市之辺ニ而称名寺殿ニ得御意、先帰り候、追付帰寺可致与之趣ニ而御座候、唯今赤井殿松任より之御書面二者、聞合之義手筋も有之候間、是より又々出府致候与之隣院殿へ之書面致披見候、然者様子も何分相知レ可申与被存候、

一、当月七日二京都一条殿焼失被遊候処、築地之内者何も残不申候、但シ出火者於一条殿御隠居所之様成所有之候哉、其所より火事出候旨ニ而御座候由京都より申參候旨、惠照咄ニ承申候、扱々奇怪之事ニ而候与、各々取沙汰致候、加様成義有之候得者、関東へ者勿論、国々之大名へ飛脚を以為御知有之事ニ候哉、金城殿へ京都より御飛脚參候旨、是又本光寺殿之内惠照咄ニ承之申候、

一、先月迄出申候星之事、京・江戸之天文者ハ於京・江戸者火災可有之相与之占、金沢之天文者者北国筋ニ者疫癪可有相与占申候、大概其占相符合致候之趣、取沙汰有之候旨、則惠照咄申候、

一、今朝六過頃より雨頻ニ降出シ、日之内者降続、夜も宵之内者降候而、物淋敷事共ニ候、此外差而相替候事者無之候、

十七日

一、碁・将棋者強而可好物ニ而者無之間、用捨可有之、又淨瑠璃者何之益ニも不立物ニ候得者、堅無用ニ可致事、且町人者其分限不相応ニ不相見様ニ可嗜事勿論ニ而候段、金城殿被仰出候故、金沢町内も御触有之、頃日当所も触有之候由、埴田屋弥兵衛咄ニ承之申候、

一、朝より雨頻ニ降申候而、少々之晴間も無之、且夜之内も折々降候、其外差而替義ハ無之候、

十八日

一、今日より養母光輝院祐照禪尼拾七廻忌法会廿日迄致執行候処ニ、昨日より雨降通シ、扱々氣之毒成義ニ御座候、何卒快晴致參詣も有之候様ニ与存候、就夫松任院も五年振ニ而被參候、

集会所

月番衆御中

一、栗津主税益後二月番被仰付候段、尾州之僧咄候由二而、松任聖興寺殿咄ニ承之申候、
(元昭)

十九日

一、今朝者南風余程荒々吹、雨も夜前から降通シ、少之晴間も無之、夜も折々者強々降申候、其外差而相替候事も無之候、

一、当月九日之大風之節、於金沢天徳院葺替致居申候、桶屋四人共二屋根から吹落され候内、式人ハ即時ニ死申候旨、聖院殿ノ咄ニ候、

二十日

一、今日者朝から雨も降不申、風替候故快晴致、法会も首尾能満座致、

大悦候、且夜も静ニ風杯も無之候、

一、於金沢堀川智覚寺辺ニ、式三日先二人死居申候、檢使相改候処、

身之内二三ヶ所有之、其上舌を切候旨ニ候由、刑部卿殿頃日出府有

之、承候旨ニ而御咄承申候、

一、於我境内旅人死候而、公事場を経候而、檢使を受可申様成義有之

候節之書付二者、御檢使与者不書申物ニ候、是者當夏於松任越後國

管原郡之二十四輩巡廻之者死候砌、松任真教寺から之書付ニ檢使与書、

瑞泉寺へ遣申候処ニ、御檢使与可書旨役僧申渡候故、其通書替遣候

処ニ、寺社所から御之字入不申候旨、書替遣可申段与力共申渡候旨、

松任聖院殿御咄ニ承申候、此等者有間布事之不時出来致候節之御心

得之為ニ与而御咄有之候、

一、当郡之一件聖興寺殿与色々申合候処ニ、奥意者家老中茂御賞覽有

之候与之義ニ可致様ニ可取計候哉、此以前功徳聚院様御代ニ者御影

御賞覽有之候与而、御供申小松五ヶ寺上京有之候得共、御覽而已ニ

而差而相替品無之候旨承伝候間、此度も若々左様成義有之間敷不存

候、万一小様ニ候ハ、五ヶ寺共ニ御供申上京有之、家老中から右之

通被申渡候ハ、御次ニ迄可參旨可申募様ニ與聖院殿被申候、未審

存候、

一、於金沢御坊烈座之内、超雲寺者先達而御暇被下候処ニ、今度残り

烈座仲間から京都へ申遣候趣者、超雲寺義先達而御暇被下候得共、彼者居不申候者而ハ寺社所へ罷出、公辺御用筋分明ニ埒明申者無之候間、何卒御召返有之候様ニ与之義、窓明申者無之候

成義ニ候得者、宣布示談ニ及ヒ度守之事ニ候得共、御坊御肝煎之内式拾人講中一向ニ御召返シ之義承知不仕候与之義、此超雲寺御召返を烈座仲間から相窓候者、是皆金銀之所為ニ而、御坊之烈座者皆御坊之銀子を借用致居申候間、超雲寺手切候得者、右之銀算用可有之候間、左様有之候得者、各々算用不致候者而ハ難成義ニ候間、其道を防候手便ニ右之趣を考出シ候様子ニ相聞候与之取沙汰有之候旨、赤井殿御咄ニ承候、

二十一日

一、朝から青天快晴ニ有之候処、暮合から雨少々宛降出シ、夜ニ入候而者

風も余程有之、雨頻ニ降、雷鳴暫時之間者、嚴重成荒ニ而候得共、

一時之間ニ而、早速ニ晴申候、

一、京都から申來候者、頃日於雨壺の方ニ旗星与申星出候、其星者光り

毫筋ニ而其光り動キ乍左旗之如クニ相見申候故、旗星与申候旨承候

与、竜助町笠屋平四郎咄ニ而承之申候、色々之替有之候事ニ候、

二十二日

一、河原新保へ寺役有之、出立致候処ニ、朝者景色宜布候得共、四頃

より之外風雨頻ニ吹降、寺井村を通過、栗生村間近ク相成候処ニ雷

厳布鳴渡り、西北之辺から辰何筋も上り中ニも眞白々相見申候辰も有

之候、其吹荒候間、八頃迄ニ而止申候而、夫から漸々ニ晴渡り、彼地

ニ宿候処、夜者静ニ月も澄登候而、北風少々吹申候、

一、金城殿弥明日江府へ御發駕有之候筈ニ承候、就夫御紋不残三葵ニ

相成候而、改り候様子ニ承候、奇怪事与山代屋善兵衛咄申候、如何

之義ニ候哉、慥成義承度候、

二十三日

一、今日四頃、河原新保を出立致シ、帰寺之節ハ朝から以之外快晴ニ而

道中も賑布、余程往来之者共も有之、田畠も取入之最中二相見申候、夜も静ニ差而相替義者一向ニ無之候、

一、当所於稻荷芝居致候子共、越前三國へ參、芝居狂言致、余程当り候處ニ、非人頭共与申分有之候而、余程金子遣申候、夫々思敷事も無之故、福井へ参り、又候狂言致居候處ニ、右之申分ニ、又々取強騒敷故、頃日帰国致候由、鳴田屋又右衛門方ニ而承之申候、

二十四日

一、朝迄以之外快晴ニ而、日之内風も無之、靜成夜ニ而御座候、昼夜共ニ差而相替候義者無之候、

二十五日

一、朝迄快晴致候、今日者仲間中并法中へ、先達而致執行候法会之返礼ニ参相済申候、夜も静ニ候、

一、粟津村之湯者、以前兵乱之節打働候法師達、或薄手を合セ、疵を蒙候故、此湯を尋浴候ニ、立處平癒致候ニ付、法師達湯屋取立、銘々湯二入候方、次第二繁昌ニ相成、是迄相伝候故法師湯与申候旨承伝候与而、蘭屋与三兵衛咄申候、

一、金城殿弥当廿三日五ツ半頃御発駕ニ而候處ニ、新敷御挾箱出来致候ニ、其御挾箱之御紋者三葵之金紋ニ而候、尚又此度者御屋敷へ者御入無之、直ニ公方之西ノ丸へ御入之筈ニ候旨、当町会所へ申来、則今日御作事所ニ而承候段、府中屋庄兵衛咄候由、知照咄申候、先達而も加様成義承候得共、何とやら未審被存候、

二十六日

一、朝迄快晴ニ有之候處、九頃迄南風余程吹出、次第二打曇リ、暮合左雨降出し、夜五頃迄余程降続候處ニ、五頃迄雨霽静成夜ニ相成候、此外昼夜共ニ差而相替義ハ無之候、

二十七日

一、当月廿四日二東本願寺御用与申、柄封を首ニ懸候侍飛脚通り候旨、教恩寺咄ニ承之申候、

一、委細之義者存不申候得共、八九年以前ニセキ之覺住与金沢御坊烈座仁隨寺与申分有之、覺住者西へ帰參致候、其子息慈門与申者、先々月歟、(西本願寺法如)西御門主様迄御取立有之候而、於越前福井内陣地へ入院被仰付、且其寢住附之門徒者、不残福井之門徒ニ被為附候故、其慈門金沢へ披露ニ参候旨、赤井殿御咄承之申候、此等之取計事も東家老中之取訛悪敷候、御本山之御外聞与申、氣之毒成儀ニ御座候、其寢住申分之節取計之金沢御坊并寺社之役人中、今程者無面目事ニ而候、

一、朝迄雨降折々風少々宛有之候處、九頃迄霽候儘ニ而、夜分ニ相成候而も物静成様子ニ候處、夜九頃ニ而も候哉、風余程吹、雷鳴、雨頻ニ降続、明方もいまた霽不申、扱々嚴布雨之降音ニ而候、

二十八日

一、当郡一件之義ニ付、於東六条御寺内評義兩様有之候、先此度御召状及三度候處、外五ヶ寺之分者、御召之趣致違背、いまた上京無之候、此義以之之外重キ事ニ而候与申一説、又之説ニ者全御下知違背与申義ニ而者無、最初御召状之返書迄及三度候迄、身分上京之奉畏候与有之候得者、御下知違背与申義ニ而者無之候与之一説也、就中最初之御召状之砌迄御真影之義者一郡被申聞、自是御答可申上候与申候を不待、度々書状御下シ候事者、元來家老中も皆迄者承知無之候處を、中以下之役人之取計ニ而候旨承之候、且澍法庵義も爰元之取計事共も不宣趣共有之、不都合成義共も有之候故、今ニ而者少々不首尾相見候旨、御寺内之評義ニ而候段、魚屋市郎兵衛京都迄帰国致候而、筒金屋申候旨、隣院殿御咄承之候、

一、朝迄快晴、夜前迄降通候得共、頓而霽候而、景色宜布相見候處ニ、又四頃迄殊之外之亂風、雷鳴、雨頻ニ降出申候、乍併八頃二者霽あかり候得共、又々夜之内も折々雨者降候、其外昼夜共ニ相替義者無之候、

一、今浜光西寺侍従殿帰国ニ而、夜二入候故態指扣不參候与而、夜五頃当所京町津幡屋迄書状被遣候、

一、今浜侍従殿乍道足五過頃御立寄有之候砌、京都之様子共暫咄合候内、侍従殿御申候者、度々京都より御召状下り候様子ニ承候、如何之義、頓而上京も有之候哉与之尋ニ付、其義於御寺内者詳義も可有之筈ニ候、如何之趣哉与相尋候得者、於御寺内も何之様子も承不申候、先頃本蓮寺旅宿へ見舞候得者、本蓮寺被申候者、京着より凡四拾日程ニ相成候得共、いまた何之御沙汰も無之候、元来此御召者六ヶ寺一統之義ニ候得共、拙僧義ハ早速ニ上京不致候者而ハ難叶趣有之ニ付、

急々京着致候得共、いまた御用之被仰渡も無之候、何共於拙寺迷惑成義ニ存候、且此度御召之意趣者、六ヶ寺一統ニ相揃候上、当春称名寺殿惣代として上京願之義ニ付、御尋之義有之候趣ニ御座候与之本蓮寺咄ニ而候、見受候処、兩度之御明日ニ者墨袈裟ニ而所化之中へ入込參詣有之、表之出仕者無之候事、床々見受申候与侍従殿咄被申候、且又於御寺内も今程者測法庵之評判余り不宣候与斗咄被申候、急成義故此外相替候義も承不申候、

一、当月九日之大荒ニ而、本吉辺以之外作方損候者、其節雷与申候獸出候而、殊之外物を荒シ候由承之申候、此獸者西国辺ニ者度々出、田畠等を荒シ候様成事も有之候得共、北国筋ニ者是迄一向無之事ニ

御座候旨 赤井殿御咄ニ而御座候、

一、先達而評判有之候者、当月七日(一条道香)一条殿御築地之内不残御焼失被成候与申候、又之說二者女院様之御屋敷成御藏焼失致候与申、両説有之候得共、無之事之様ニ相聞申候、頃日京都より書状下シ候内ニ者、左様成義ハ無之候得共、当月七日ニ一条殿御逝去被遊候与之義有之候与、能美屋兵次郎咄ニ承之申候、

一、是迄京二条之城之諸司代御勤有之候(阿部正右)安部伊豫守殿役替、御家老を被仰付、頃日江戸發駕有之候旨、京都より申来候与能美屋兵次郎咄申候、且又於京都も此頃者以之外之風邪ニ而、釜ニ而薬(煮方)煎シ候程之事ニ候得者、南北之芝居も止ミ、子共芝居も相止候而、殊之外淋敷

一、先達而爰元より京都集会所へ為登申候飛脚、今朝帰宅致、則集会所審奉候故相尋候得者、御返事可被遣問、暫逗留有之候様ニ役人中より被仰渡候間、逗留致候旨申候与、廿一日京都出立致候者之咄ニ而候段、昨日隣院殿御咄ニ而承之申候、

一、朝より景色も宣布、夜も静、風も無之候而、昼夜共ニ差而相替義者無之候、

十月朔日

一、朝より快晴ニ而候故、松任聖院殿へ先達而法会執行之砌、出勤有之候、為挨拶參候ニ、道中余程賑布相見申候、挨拶事済七半頃彼方出立致候処、水嶋村より日暮、手取河原を参候処ニ、於西之方替たる星出申候を見々河原ヲ参申候、其星者先達而出候星ニ似、光り毫筋道之東之方へ指シ、星者西之方ニ出候而、薄曇候様ニ相見申候、自夫河原を通過、栗生之茶屋ニ暫之間休息致候而、立出候処ニ、最早其星ハ見ヘ不申候、唯宵之間而已出候様ニ相見候、先達而京都より申越候与而、笠屋平四郎咄申候、於雨壺旗星与申星出候与申候者是ニ而候哉、何之道ニも替たる星、初而見付申候、

二日

一、先達而爰元より京都集会所へ為登申候飛脚、今朝帰宅致、則集会所より返書参申候、文言如左可見、
十四日之御飛札并別紙毫通相達致薰誦候、則以御書面御家老中へ申上候、左様ニ御心得可被成候、為其如斯御座候、以上、

集会所月番

印

九月廿五日

勸帰寺殿

本光寺殿

勝光寺殿

称名寺殿

右之通二而、外ニ相替候品も無之候、飛脚蛭川屋長兵衛与申者隣院殿へ参候間、是迄致遅々候様子共相尋候得ハ、道中水多ク出候而京都廿一日ニ而候、自夫集会所へ参、右之御状箱上候処、懸々之飛脚ニ而候哉与之間有之候故、左之通与相答申候、然者御返事可有之候間暫逗留有之候様ニ与申渡候、就是飛脚之義ニ候得者、其用意も無之候間、何卒御受取被仰付候ハヽ急可奉存候段申候得者、又々押返シ、御返事有之候間、逗留有之候様ニ与之義、御申渡候間、一兩日立チ候得共何之御沙汰も無之間、円光寺殿江参、右之様子申候処、夫者又々集会所へ参、返事之義責候者而ハ果申間敷候間、左様ニ可致候旨、(円光寺)大杉殿御申ニ付、夫方集会所へ参願候得者、右之御返書出申候与之段、飛脚之者物語致候、

一、今日も朝方快晴ニ而候、金城殿御紋三葵ニ相替候与之一評有之、又其後二者御先キ挾箱之紋斗者三葵ニ相替候而、此度者於江府も御屋敷へ者不被為入、直ニ公方之西ノ丸へ御入ニ而、則御後見ニ候由、当町会所へ申來候旨、当所於御作事所評判有之候承、是以未審存居候故、金沢ニ而為相尋候得者、一向ニ左様成義承不申候、乍併当月廿三日金沢御發駕之節方大桶迄者三葵之御紋付候御羽織被召候得共、大桶方御装束御替被遊候事者承申候旨、金沢尾張町能瀬屋半兵衛咄申候段、金府方帰り山代屋善兵衛咄ニ承之申候、此義者有間敷義ニ而も無之、拝領与申事も有之候事ニ候得者、此義者尤ニ存候、先達而之二説者雜説ニ而候哉与被存候、何事を承候而も与得承合可申事、勿論尤之事ニ候、扱々夜も静成景色、霜之嵐、寒キ夜ニ而御座候、

一、於江沼郡山中薬師寺之開帳当り年者来年ニ而候得共、其日数日和百日之内、当年八月廿一日方廿八日迄二七日之間開帳有之、残ル日數者来年ニ而候旨、北市屋五郎兵衛咄ニ承申候、

三日

一、朝者薄曇り、雨も少々降候得共、九頃者余程景色宣布相見候処、八頃方雨頻ニ降、暮合方風少々吹出シ、夜ニ入候而は風も余程荒吹候得共、早速ニ止ミ、雨降物凄敷、冬景色斯可有事ニ而候与被存候、其外昼夜共ニ相替義差而無之候、

四日

一、朝者薄曇り、雨も少々降候得共、九頃者余程景色宣布相見候処、八頃方雨頻ニ降、暮合方風少々吹出シ、夜ニ入候而は風も余程荒吹候得共、早速ニ止ミ、雨降物凄敷、冬景色斯可有事ニ而候与被存候、其外昼夜共ニ相替義差而無之候、

五日

一、本折淨誓寺旦那之内死去有之、案内之紙面文言如左、

口上

拙僧旦那てん与申女、京町清水屋四郎右衛門方ニ懸り人ニ成居申候、今朝致病死仕候間、及案内候、今晚五ツ時ニ葬式仕度由申越候間、御伴僧衆之内御老人御參詣被成候様ニ被仰付可被下候、

十月五日

淨誓寺印

勝光寺様

御台所

右之通申遣候間、葬式時刻ニ相勤候様ニ知照へ申付候、

一、朝方昼之内も不宜景色ニ而、雨風折々頻ニ荒渡り、殊ニ夜中之物凄さ、冬風頻ニ吹荒、雨霰之降下ル音すさましく、暫時之霽間もなぐ、音嚴敷相聞申候、実移り替ル冬之景色之物淋布覚申候、

六日

一、朝之内者暫時景色も宜布有之候得共、夫方者風荒吹、包雪余程降、扱物淋布冬景色、尚暮合方夜ニ入候而者、風はけしく吹荒、雨・丸雪之降音凄敷、終夜雨戸障子之鳴渡り実浅間布覺申候、

七日

一、朝者暫之間荒候得共次第霽、景色宜布成、夜も静ニ雨風一向無之

候、昼夜共二相替義者差而御座なく候、

八日

一、朝迄景色宣布、風も無之静ニ而御座候処、暮合頃迄少々風吹出候而、夜ニ入候而者雨頻ニ降、風も余程ニ吹、折々者物すさましき事共ニ而御座候、且今宵者例之夜御講ニ而候得共、流行風邪故ニ候哉、講中之内漸山上屋孫三郎壱人相見申候迄外無之候、

九日

一、朝迄氣色も先者宣布分ニ候処ニ、八頃迄風少々吹出シ候故、暮合頃迄雨も降出、夜ニ入四過迄者余程吹荒候、併頓而荒者止申候様子ニ而、明方二者靜成氣色ニ相見申候、昼夜共ニ差而相替候義者無之候、

十日

一、朝迄景色も宣布、風者少々有之候得共、降物者不致候、夜も静ニ風も無之候、此外昼夜共ニ相替品者一向無御座候、

十一日

一、朝迄冬景色之快晴、靜成事共ニ而風者少も無之候、此中江沼郡へ報恩講触ニ遣申候所、大聖持ニおるて當寺旦那弓波屋藤八与申者、是迄寺へも取持致候得共、不如意ニ相成、頃日欠落致候様子承帰申候、扱々氣之毒成義ニ御座候、風邪者此邊迄強リ候様子ニ相見申候、其外相替義者承不申、昼夜共ニ替候品一向ニ無之候、

十二日

一、朝迄景色宣布快晴致候而、宵之内者風もなく、靜成様子ニ相見申候所、夜ニ入九頃ニ候哉、余程雨降候音致申候得共、早速ニ霽申候哉、明方二者何の音も不致、靜成事共ニ而御座候、此外昼夜共ニ相替候事も無之候、

十三日

一、朝迄薄曇居申候所、折々雨降候、且暮合迄四過九前迄者靜ニ候所、九過頃ニ候哉、冬風荒吹、戸障子之鳴音物すさましく相聞申候、風

之吹候間者一時程之間ニ候処、夫迄雨降出シ候得者、風も少々宛和

ニ相成申候而、明方二者一向ニ風音無之、唯安宅浦之波音而已」とそ

音高聞候、

十四日

一、昼之内も折々風雨頻吹荒、尚暮合迄四前迄者風はけしく吹候得共、四前頃雨降出シ候得者、風者靜ニ成申候、

一、当所法海寺門前ニ觀音堂建立与申札立居申候ニ付相尋候得者、先達而も土藏作り之觀音堂有之候処、中古無之、今者再建ニ而候旨、能美屋久右衛門咄申候、

一、於金府珍布事も無之候哉与相尋候得共、差而珍敷説与而者無之候、併金城殿江戸御發駕前ニ者御手廻り之御道具与相見申候而、三葵之御紋付之物余程出来候旨取沙汰致候、且又時次郎殿義者、來春雪消次第江戸御發駕ニ而候旨相決候段、能瀬半兵衛咄申候、

十五日

一、朝迄宣布景色三而御座候処、七半頃迄打曇り、暮合ニ者雨降出シ申候而、又霽候後、冬風乱吹音すさましく相聞申候処、頻ニ雨降出シ候而、暫風者止申候得共、夜ニ入八頃ニ而も候哉、風雨頻ニ候而、余程成雷鳴渡り、物すくことゝもニ而候、扱々冬空之定さる景色共ニ而候、此外昼夜共ニ相替義ハ無之候、

十六日

一、昼夜共ニ折々風雨頻ニ降荒候而、ものすくことゝもニ而候、此外相替候義者差而無之候、併如例年明日迄二十日迄者引上報恩講ニ而候処、今日者花日ニ而候得共、花指人共風邪故間違、漸手前・來生寺・知照三人ニ而六瓶之花を指仕廻申候、扱々もの憂キ事共ニ而候様ニ覚申候、

十七日

一、如例年今日迄引上報恩講相勤申候処、今日も朝迄景色不宜、折々風雨吹降荒候故、參詣之程在山迄も難參候哉与氣之毒ニ被存候、乍

併夜二入候而者風も無之晴天二而候故、明日者景色も宣布相成候哉
与氣強申候、

一、頃日松任を通り候者之見受候処、松任之町通筋二おゐて吊場拾九
ヶ所有之候、依之相尋候得者、当年之風邪二而死去致候者其之吊場

二而候旨、咄申候由取沙汰致候、

一、先月者流行致候御風邪二而候哉、御門跡様十日斗御參詣無之候
段、頃日者段々御快氣被遊御出仕も有之候旨、京都迄帰り候者之咄
二御聞之由、隣院殿御咄二而候、扱々上下万民押而之風邪、不思義
成事共ニ而候、

十八日

一、朝者薄曇り居候得共、次第ニ景色宣布相成候故、在山迄も如常ニ
參詣之者も有之候而、賑布報恩講ニ而大悅致候、夜も靜ニ風もなく
候、此外昼夜共ニ相替義無之候、

十九日

一、朝迄以之外之快晴、冬景色者珍布日和ニ而御座候故、參詣も相応
珍重之事ニ候、夜も靜ニ風も無之候、乍併明方二者少々雨之降候様
子ニ相聞申候、

一、夜五ツ頃火事ニ而候哉、又者稻番之者共之燒候篝火ニ而候哉、余
程成火能美村・千代村辺ニ當而相見申候、いまた其美否相知不申候、
太鞍頻ニ打候故、当寺報恩講取持人并籠人之者共立騒キ候得共、其
内火しめり、事靜ニ相成申候、

二十日

一、夜前五頃之火は弥火事ニ而候旨、小野村之ろく与申やもめニ而、
風も無之候故、壱軒焼、類焼者無之候旨、則千代村三郎兵衛今朝參
詣ニ而咄申候、扱々相應ニ秋入も可有之候ニ、氣之毒成義被致申候
旨取沙汰、不便成義ニ而御座候、

一、朝迄薄曇候所、四ツ頃雨降出シ申候得共、早速ニ霽申候而、其後
者降不申候、先報恩講も前後無障致執行、満座大悦不過之候、且夜

之内も静ニ雨も降不申候、昼夜共ニ相替義無之候、

二十二日

一、当所本光寺殿へ報恩講ニ而參詣致候処、串村之芝居も当廿五日切
二相仕廻候由、則院主咄ニ而承之申候、乍併此間者余程候様子ニ而
候間、迎も当月中者致可申与被存候、

一、朝迄不宜氣色ニ而、折々風雨頻ニ降吹荒申候、乍併夜者靜ニ月も
澄渡風雨一向無之、霜夜之嵐寒キ事而已ニ而御座候、

一、江州膳所之者之由ニ而、当所了助町長保屋利右衛門方へ参候、其
由を相尋候得者、当夏敦賀之茶問屋迄之添状ニ而、能州鳳至郡宇出
津研屋三左衛門方へ茶を下シ申候、代金之義者当八月初ニ可遣約速
ニ候処ヲ、夫迄一向ニ書通も無之候故、罷下リ申候、代金者四拾両
斗之事ニ而候、則敦賀之間屋ニ而も様子相尋候処、爰元迄も美濃茶
余程下シ申候、其後書通も無之候故、飛脚ニ而も可下哉与存居候砌
ニ而御座候、幸之義ニ而問、与御御聞定可然杯申候、夫故能州へ罷
下リ候与咄申候、就夫道中之様子不案内ニ候与而、手前方へ相尋與
候様ニ与而、吉竹屋九兵衛を以申入候故、委曲申聞候、彼方ニ而も
余程之町人、御用聞与申様成者ニ而も候哉、膳所殿之柄封ニ而下リ
候由、吉竹屋九兵衛咄申候、若々首尾克字出津へ着致候而も、研屋
三左衛門方ニ一向不存事実正ニ候得者、無益之つひへ無所詮氣之毒
成義ニ候、乍併敦賀之間屋迄請文并添致候事ニ候得者、畢竟者間
屋も迷惑成事共ニ候、併如何之義ニ相成候哉、其程無心元被存候、
手前存候者研屋三左衛門与申者者、酒屋并質屋ニ而、左様成壳方者
不致者之様ニ存居候、仮令商壳替致茶店致候与も、四拾両位之金子
ニ指支候程之者ニ而者無之候得者、定而馬鹿者之借名致候哉与、大
概者被存候、

一、角院殿來月二日弥着寺之由取沙汰致候、依之引上報恩講執行之義も來月十四日迄相勤候旨、評判致候、

二十三日

一、串村之芝居も弥夜前切ニ仕廻申候旨、則彼地茶問屋甚五郎咄ニ承之申候、
一、朝迄氣色も快晴ニ而御座候、夜も静ニ風も無之候、昼夜共ニ相替候義者無之候、

二十四日

一、先達而若杉村兵助祖母病死、葬式之節本蓮寺代僧法幢諷經三出候得者、本覺寺役僧灯明寺申候者、本蓮寺殿之御諷經之義ニ候得者、

御勤之義ハ難成候間、被帰候様ニ申候得者、法幢申候者、然者其趣一筆遣可申由申候程灯明寺申候者、遣可申候得共此所ニ而難調、宿

二而相渡可申間、左様可被心得旨申候得者、法幢者無詮其所を帰り申候而、其翌日本覺寺へ参候而、右之由を申、任約速今日是迄参候

間、先達而約速之通一筆可遣、夫ニ而京都本蓮寺方へ可申遣旨申候得者、久布間法幢を敷台ニ為待置候而、其後之返事ニ者、先達て先

住聞知院死去、葬式之砌、外御仲間之御諷經迄を指留候事、唯本蓮

寺殿壱人所為ニ候、依之此度之諷經者指留申候間、此趣京都本蓮寺

殿へも可申遣段申候、依之法幢者又無所詮帰り候由、茶屋九右衛門咄申候段、來生寺咄ニ而承之申候、

一、朝迄薄曇り居申候得共、雨者降不申候処ニ、九半頃迄雨降出シ、終夜霽間なく降明申候、

二十五日

一、本蓮寺義、一昨日七頃迄江戸被歸、今江戸而日暮シ候而、帰寺

被致候由、能美屋左兵衛爰元台所ニ而咄申候段、承之申候、京都之首尾如何之事ニ候哉承度事ニ而候、

一、朝迄四頃迄者氣色宣布相見候処ニ、夫迄風雨頻ニ折々吹降申候、夜も不宜、少シ暖ニ候而、荒氣色ニ見へ渡り申候、其外昼夜共ニ相

一、朝迄八頃迄者宣布氣色ニ候処、冬空之無暮者暫時之間ニ、時雨之

替申品無之候、且角院殿帰寺粗承候処、いまた実否相知不申候、併廿三日之暮合ニ法幢今江の方へ參候ニ、本蓮寺殿舍弟同道ニ而參候、若其節近巡之由ニ候哉、其程難斗被存候与志屋咄ニ承之申候、

一、本蓮寺殿御帰寺之旨承之申候、如何与相尋候得者、いまた御帰寺ニ而者無之、今日ニも御便り候哉与相待、唯今御寺へ參申候与村井屋善兵衛申候旨、教恩寺咄申候、尤隱シ候趣ニ相見申候得者、其程難知候、

二十六日

一、当所天神之別當梅林院方迄泉屋嘉兵衛内義死去之節追悼、

菊いかに宿のなげきを

夕しきれ

と申遣候由、朝倉屋太兵衛咄申候、面白事ニ而御座候、乍併中ニも

此句難聞杯申族も有之候旨咄候得共、菊者乍有歎有、宿之夕時雨与者能取合、剛者之云方可有勘考、

一、朝迄不宜氣色ニ而、風雨頻ニ降吹荒候、夜者靜ニ風も無御座候、霜降氣色ニ相見申候、

二十七日

一、頃日承候得者、金城殿宰相へ御昇進被遊候而、弥当公方之御後見

ニ而候旨、且又諸普請いた成就無ニ付、御城御普請料御合力と

して四万貫目公方迄被進候由、取沙汰致候与、大文字町辺之髮結仁

右衛門与申者咄申候得者、其趣石黒清太夫も被咄候由、桶屋四郎兵衛咄申候而承之申候、併加様成事者説与申者有之候得者、其程難斗候、

一、角院殿いまた帰寺無之候、就夫只今迄上京無之、銘々以之外御本山表之御取計惡布御座候而、在京致居候而承候も氣之毒成程之事ニ

候、且此度當郡一件之義ニ付、御使僧歟、又者御使者之可下筈ニ

候、大概者其節可罷下旨候与之書面、頃日下り候由、本蓮寺殿之門徒之内之者咄之候由、埴田屋弥兵衛咄申候、

様子相催シ、夫カ者折々一時雨宛者吹荒申候、夜も其通ニ而、折々
雨風繁布降荒候音之相聞申候、其外相替申候事も無之候、

二十八日

一、來月二日爰元着ニ而、澍法庵外ニ役人被相添罷下リ候筈ニ御座候
由、安藤喜槃咄申候、先達而埴田屋弥兵衛咄申候与相應致候、

一、朝カ暮合迄者宜布氣色ニ而候処ニ、夜ニ入候而者、折々風雨頻ニ
吹降荒候、但シ四半頃二者余程丸雪抔交リ降申候様子ニ音聞申候、
一、大聖持松平(前田利道)備後守殿、当月十五日ニ、先達而被仰付候御普請御渡
有之候而、十六日御暇出候故、來月初方渡リ二者御帰城可有之由取
沙汰致候旨、墨屋吉右衛門咄申候、

二十九日

一、当所土居原町角屋善兵衛下男、首をしめ死居申候様子、今朝見付
候由ニ而騒キ見物等も候旨、取沙汰致申候、扱々不便成事ニ候、

一、朝カ氣色宜布、風も静ニ兩も降不申、冬之氣色ニ者不似合暖さニ
而御座候、夜も静ニ風雨一向ニ無之候、但シ明後日カ如例年江沼郡・
石川郡両山廻り致候ニ付、男女之法名數百式拾枚調申候、此外別而
面白キ事珍敷事無之候、

三十日

一、朝カ氣色も宜布快晴ニ而御さ候、夜も静ニ而風も無之、唯霜之嵐
之寒ク覚申候、其外差而相替事一向ニ無之候、

霜月朔日

一、今朝カ如例年山廻り致出立候、且今度者江沼郡山中之奥山ニ而御
座候、何卒今日之通り氣色相続宜敷有之候様ニ与存斗ニ御座候、則
來生寺同道ニ而當所本折町端へ出候処ニ、西ノ方並松之下夕ニ乞食
与相見候而、人死居申候、依之往来之者ニ相尋候得者、先達而此辺
を狂歩候女ニ而、出生者柏野之者之由咄申候、扱々荒涼致体ニ而
御座候、乍併知不申候哉、早速ニ死骸も取隠度事ニ候、往来之者共
之誹を受候事者、畢竟者國之恥辱ニ而候、

一、(前田利通)大聖持殿先月十五日ニ先達而御手伝之御普請方受取渡相濟候而、
其日御暇被進候間、廿九日江戸御発足ニ而、信濃路者雪有之候故、

木曾路カ御帰國之筈ニ而、当月十四五日渡ニ者御着城之旨ニ候、且
今度公方西ノ丸御普請、尚又木曾路カ御帰國、彼は御物入之所、是
迄六万六千両程ニ御座候、扱々存外之事御郡中も以之外難渋ニ御座
候由、能登屋伊右衛門咄申候、

一、昼之内者以之外之快晴ニ而候得共、夜ニ入候得者、風雨繁敷候而、
柏野之宿り淋布居申候、

二日

一、朝カ折々雨降候得共、荒与申程之事も無之、又者日出冬山を見晴
シ候事も有之、乍併何与なく淋敷山籠り、其日者坂下ニ宿申候、夜
者殊ニ霜嵐之寒キ計ニ御座候、

三日

一、朝カ曇り氣色、折々風雨頻ニ降吹、又者晴候、其日者坂ノ下を出
立致參申候道中ニ而、山之嫁取見申候、去程ニ九谷之百姓何某与申
者之娘、越前竹田之何某与申大百姓之方ニ娶申候、其人中仲人与相
見申候者先ニ立、相続候而女三人之中、中程ニ彼嫁居申候、後ニ又
男壱人其後トニ長持を脊負申候者壱人、人中六人ニ而御座候、我等
遠巡之者共途中ニ而色々之口言抔を申、扱々面白事ニ而御座候、

一、坂ノ下辺山之内十ヶ村之產神磯宮之神体を拝見致候處、兼而承候
通り弥陀之尊像、惠心僧都之御彫刻、御長尺斗ニ拝ミ申候、櫻之
節穴カ視為出居候を、慥ニ拝見仕候、年久布被為成候得者、木筋等
白晒候而実殊勝之御形ニ覚申候、

一、今宵者西住ニ止宿致候所、夜之中暫時も霽間無之、丸雪交り之雨
頻ニ降敷、宿り一入淋敷覚申候、

四日

一、今朝者西住を出立致候ニ、一辺ニ雪降敷、折々者雪吹候而、山路
一入難義ニ覚申候、乍併八頃カハ霽、青天ニ相成申候而、夜者荒谷

二宿候処二、夜半頃より風荒吹候而後雨降、明方迄者風雨繁敷御座候、一、先達而為出候虎尾星与申星之事、七月廿六日之夜見候所、

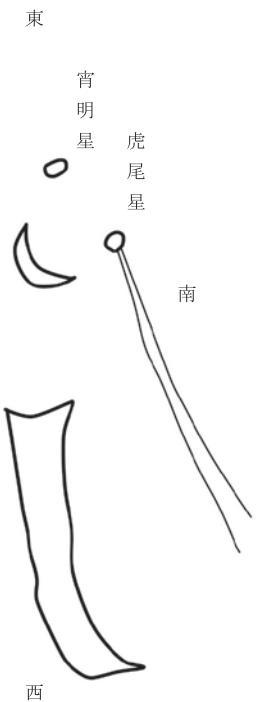
六日

一、朝より静成氣色二而、荒谷村を出立致候所、風雨之難義一向無之候、且今宵者不時ニ澗村ニ止宿致候二、宵より少々風者有之候処、明方ニ

者少シ雨降候様子ニ相見申候、

一、大聖持殿江府御発駕之事、先月廿九日与申候事ニ候得共、相延候而、当月八日弥江戸御発駕ニ而、木曽路より御帰國之旨、一昨日御飛

脚到来致候由、則澗村ニ而承申候、



右図之通りニ為出、扱々面白事ニ候、図を書記置候、月与旗雲之間六尺斗、星之光り四拾間斗ニ相見申候与而、其図を見セ候而、荒谷村肝煎長右衛門右之由咄申候、

七日

一、越前勝山之御家老、何之無調法ニ而候哉、御暇被下候、勝山殿鷹野ニ御出之旨ニ而、其場所辺江先達而日取之御触出候而、其日勝山殿御出ニ而候間、御家老五人共ニ御供有之候処二、野辺ニ而不時ニ五人共ニ御暇被下候、然所其場ニ而五人共ニ警を切捨立退候、其跡者五人之屋敷結所被仰付候由、取沙汰有之承候由、則澗村ニ而咄承候、

一、九前頃澗村を出立致、帰寺之節迄者氣色も宜布相見申候所、冬空替早夕、忽曇り風雨頻ニ吹降荒レ、雷電嚴布、暫時之間者物音も聞ヘ兼申程之事ニ候、乍併雷者止候得共、雨者間もなく降申候、帰着致候而も、夜も荒ク吹降荒申候様子ニ相聞申候、此外差而別条無之候、

八日

一、朝より曇り居申候得共、風も無ク雨も降不申、静成氣色ニ而御座候、且夜之中も風雨無之、烈星之光輝明ニ相見申候、其外昼夜共ニ差而相替候義者無之候、

九日

一、朝より日之内者宜布氣色ニ而御座候得共、七頃より少々風有之、去共雨者降不申候、夜之内も何様九半過頃ニも候哉、雨頻ニ降布、風も荒吹候得共、最早明方ニ及候而者、荒も止申候様子ニ相聞、静ニ東雲ニおよび候、

一、朝より風雨荒ク吹降統申候而、暫時も無霧間候処、暮合より晴氣色ニ而、夜者以之外静ニ風雨無之候而、唯荒谷村寒風一入寒ク覚候、

十日

一、今日八頃串能登屋方へ報恩講可勤約速致參候、途中ニ而角院殿帰寺之様子ニ而、近迎之人數弁當杯相見候、且彼方勤相濟シ、暮合ニ今江村を通り候所、其人數中村屋方ニ相待居申候体ニ相見申候得共、院主者いまた被帰申候様子相見不申候、乍併角院殿新發意家來共ニ今江村橋之上ニ而相尋候所、弥今日被帰候様子ニ咄申候、

一、先達而、於串村人形芝居致居申候役者之荷物之事、芝居相濟候後

相對を以串村方舟を戻、潮津村へ着船、夫方篠原之者共を戻候而、

為脊負磯辺へ出シ、越前三國之間屋へ上ヶ候様子を、細呂宜之馬子

共見付相尋候得者、是者於串村芝居致居申候者共之荷物ニ而候与相

答申候、夫方彼荷物を付込候間屋へ馬子共參申候而申候者、串村之

芝居も相仕廻候様子、頃日承居申候故、其荷物之登り候様子を、今

日哉明日哉与相待居申候所、加様成義与近頃難心得候間、役者荷物

之分者不残私共へ御渡被下与申候得者、三国浦之間屋相答申候者、

一度問屋之手前へ付込候荷物者、其方共へ相渡候例、是迄一向ニ承

も不及事ニ候得者、難成与申候故、其上彼者共与彼是論合候上、左

様ニ候ハ、此趣者難捨置候間、金津諸司代へ相達、其上之取計ニ

可致候、元來宿場与申候者公義之人馬故、身過ニも世過ニも不合、

堺里式拾堺文宛之伝馬を相勤居申候者、加様成荷物之大番物を以宿

場之助成与致候、然所加様之逃荷等有之候而者、宿場も難立候間、

金津之諸司代之御取計次第二可仕与申、馬子共者帰り候而、金津之

馬子共与取組、諸司代へ右之一件相達候所聞上ヶ、左様之趣ニ候

ハ、其趣之通り問屋へ付込候荷物者、仮令筋合之違候而も相渡候

事難成与申一筆問屋方取參候ハ、其上僉議可致候与之趣ニ而、又々

馬子共三国之間屋へ參申候所ニ、何与存候哉、荷物不残相渡申候所、

馬子共之申候者、迎も此荷物を以後之見せしめ之為、不残燒払可申

旨示談致候を打合、先々取しつめ候而、金子ニ而取扱候得共、中々

五拾両や七拾両二者了簡難致旨募申候、乍併役者ニ而も座本方頼申

候事ニ候得者、大概者金子ニ而も宿場之手前者相濟可申候得共、逃荷与申分ニ而、三国之間屋者迷惑ニ可有之候旨、最中騒動ニ而候由、取沙汰有之候由、山代屋善兵衛咄申候、

一、朝方氣色甚宣布、霜月頃之天氣ニ者不似合氣色ニ而候、夜も静ニ風雨一向ニ無之候、昼夜共ニ差而相替候義者承不申候、

十一日

一、今日串へ參詣致候、下向之刻承候得者、本蓮寺殿愈夜前帰寺被致候由承候旨、御座屋權兵衛咄申候、

一、昼之内者氣色宣布、風雨無之候而、至而靜成天氣相ニ而御座候、乍併七半頃方少々風者有之候得共、雨者降不申候、

一、大聖持殿被仰付候御普請方并ニ木曽路御帰国芳々、御物入も可有之候ニ付、江戸方御金御用承度旨ニ而態々參候得共、此度者先之御用金無之候間、左様ニ可被存旨被仰出候間、空三布帰国致候由、下江屋七兵衛咄申候、

一、角院殿夜前被帰候様子御座屋權兵衛咄ニ承候得共、今晚承候得者、今日七半頃弥着寺之由、埴田屋弥兵衛咄申候、京都之首尾合如何之義ニ候哉、様子承度候、

一、昼之内者風雨無之、靜成氣色候得共、暮合方雨少々降出シ、夜二入候得者、風雨頻ニ降荒、折々者ものすこく相聞候所、明方者少シ風雨も静ニ相成申候、

十二日

一、今朝者河合村泊リニ而、例年之ことく石川郡秋廻ニ出立致候、氣色も不宜候得共、時移候ハ、宣布相成可申候様ニ被存候所、八頃迄者雨・包雪等折々吹荒候得共、其以後者風雨止ミ、氣色宜敷相成候而、夜者静ニ、河合泊リ之霜嵐寒ク、手取川之川上成水音而已夜終

聞居申候、

十三日

一、朝方氣色宣布風雨無之候而、夜も静ニ、乍併夜半過頃歟、少々雨

者降候得共、早速ニ霽候而、唯板尾泊り之霜風一入寒覚申候、

十四日

一、朝迄天氣宜敷、夜も宵之程者宣布相見候所、夜二入候而者、雨・
丸雪降敷、風も少々有之候而、音すさましく、板尾山之霜風而已ニ
候、

十五日

一、板尾を出立致候所、朝迄雨・包雪降布候而、いと、寒々、夜者静
ニ風雨無之、月も照渡り、中直海泊り之夜終嵐者すさましく覺申候、

十六日

一、中直海を出立致、歌占之滝之様子を見物致シ、夫迄白山之建替候
御普請を見候所、奇麗ニ出来致候、乍併古跡之替り新出来之普請方
者不似合ものニ而候、唯ものことの白晒而木筋杯之出居候こそい
と、殊勝尊けれ、就夫いた御普請受取渡も不相済候故、遷御も無
之、且其上御普請成就之棟札可掛置ニ付、棟札之連名之義ニ付、長
吏・神主論義出來致候故、遷御相済不申候由承申候、

一、朝迄天氣宜布相見、次第二快晴致、今宵者鶴来ニ止宿致候所、夜
も静ニ、唯川音霜嵐而已ニ而候、

一、先々月於京都珍布塙壳歩行申候、此塙壳之男者生國者丹波之者ニ
而、大坂筑後之芝居ニ被抱居申候得共、何之故ニ哉、外役者之妨有
之候而、暇乞致候、其砌築後申候者、惜布役者ニ而候得共障有之候
義ニ候得者、無是非仕合ニ存候、就夫商売方之望有之候ハ、仕込之
カ京都へ出、人を頼申候而、彼是壳方も取計候得共、存寄候壳方も
無之候故塙壳を致、日夜を送申候ニ、其塙壳古今之美男、且装束坏
も縮緬等之類、異形成事難尽、殊ニ呼声も常与者相替居候故、珍敷
一入繁昌ニ有之候、其頃有柄川親王御遷化ニ而御葬式行烈見物之
為、(三条西実跡)
(西二条殿之御姫公人見迄御覽有之候処、行烈等通過候、送後二

彼塙壳之男塙壳之參候を、局方御姫公ニ委曲之咄歎有之候処、御姫

公彼男ニ被遊恋慕候而、御文杯をも被遣候処、御姫公御居間を逃出、
彼男之旅宿へ為行候を尋相知レ、御姫公者西三条殿へ御引取町家預
ニ被成、塙壳男者宿預ニ被仰付候ニ、或夜彼男旅宿を逃出、西三
条殿門前ニ而切腹致候而、其前ニ被下候御文并書置等を置候、其書
置候御姫公ニ後迄生害為遂候へ与之事ニ而候哉与之事、何之道ニも
珍布事故、最早芝居ニ致候而、殊之外繁昌ニ候旨、京都迄申越候由、
鶴来安藤半助咄ニ承之申候、

一、当郡手取川之辺出口村之神社之事、先月金沢山崎勝兵衛方迄如何
之訛ニ候哉、普請有之、当月十五日神体遷御有之候、此村之於官者、
是迄何之様子も承不申候得共、大坂陣之節立身有之候山崎氏ニ候得
者、若々其刻夢想ニ而も有之候故、立身も有之候事、記録被留置候
故之事ニ哉、難心得与之咄、鶴来角屋弥兵衛迄承之申候、